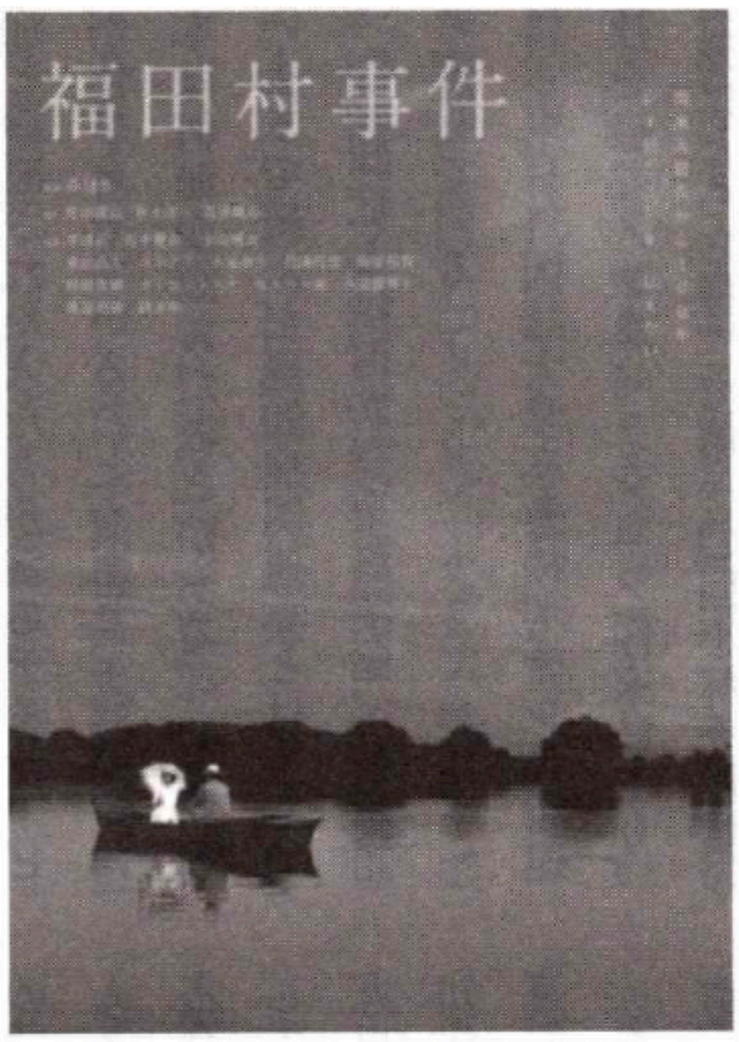
西川伸一の オススメシネマ ㉕

福田村事件
（日・2023）



「朝鮮人なら殺していいんか！」――本作のクライマックスで叫ばれるこの台詞に打ちのめされた。

関東大震災の直後に、千葉県東葛飾郡福田村（現・野田市）でも自警団が在郷軍人会を中心に組織された。そこへ香川県からの薬の行商団が到着する。彼らは被差別部落出身者だった。見慣れぬ服装やちっとも聞き取れない方言に、のため人を走らせ、真偽がわかるまでは手を出すなと群集を必死に説得する。とはいえ、在郷軍人たちはいきりたつ。他の自警団の「活躍」を耳にして、自分たちも「手柄」を立てたいと焦っていたのだろう。行商団に「一〇円五〇銭」と言ってみろ、歴代天皇の名前を言ってみろと彼らが朝鮮人である証拠を探そうとする。もちろん行商団はすらすらと「一〇円五〇銭」と発音し、天皇の名も間違わない。

在郷軍人たちの「欲求不満」が頂点に達したとき、頭が立ち上がって扇子を扇ぎはじめる。それは行商の道中で朝鮮人のあめ売り娘からもらったものだった。「朝鮮の扇子だ！」との声が上がり、一触即発の状態になる。そこへ、朝鮮で教師をして帰郷したばかりの澤田智一（井浦新）と妻で国策会社・東洋拓殖の社長令嬢である静子（田中麗奈）が駆けつける。智一は朝鮮で日本軍による朝鮮人虐殺に、結果として加担したという深い心の傷を負っていた。その智一が「この人たちは朝鮮人じゃない、殺すな」と大声を張り上げて場を収めようとする。静子も行商団から道後温泉の湯の花を買った。だから薬売りで朝鮮人じゃないと説明する。

二人は行商団の命を救うために必死だった。福田村の村人たちは朝鮮人ではないかとの疑いを抱く。一五人の行商団を取り囲んで、軍服を着た在郷軍人たちが彼らを詰問する。周りの村人たちは竹槍やとび口を手にしている。行商団の頭（かしら）（永山瑛太）が薬の行商を許可する鑑札を差し出し、自分たちの身分を証明する。

しかし、群集は鑑札は偽物ではないかと納得しない。村長（豊原功補）が野田の役所へ確認だが、彼らの言い分にカチンときた頭が冒頭の言葉を発する。なんとか行商団が助かってほしいとみていた私は、頭の至言に頬を強く張られた気がした。次の瞬間に、静子に嫉妬する村人の女性（コムアイ）が頭の脳天にとび口をたたきつける。これをきっかけにふつうの人びとが豹変し、行商人団に次々と襲いかかる。群集心理の恐ろしさだ。ついに妊婦を含む九人が殺害される。残る六人は針金で巻かれて最期の時が迫っていた。そこへ役場の役人が到着して、鑑札は本物だと報告するが遅すぎた。

死を免れた少年が役場で犠牲者は九人と知らされる。少年は九人ではなく、母親の胎内の子も含めて一〇人だと言う。この子は「望」と名付けられていて、男の子なら「のぞむ」、女の子なら「のぞみ」と読ませることになっていたと続ける。さらに、みんな名前があるんですと九人の名前を呼んでみせる。数で記号化すると、想像力がそれ以上働かなくなる。その「慣性」を戒めたのだ。

シベリア出兵の愚、銃後の性、部落差別、ハンセン病、事実を書けない新聞、そして社会主義者の虐殺などの描写も印象深かった。

（二〇二三年九月二四日・テアトル新宿）

（にしかわ・しんいち／明治大学教授）